

再生可能エネルギー2010国際会議 報告書 <要約版>

会期:2010年6月27日(日)~7月2日(金) 場所:パシフコ横浜

会議概要報告

(1) 本会議開催の背景とその社会的意義

本会議は、わが国として初めて2006年幕張メッセで開催した「再生可能エネルギー国際会議」を起点として、これを持続的に発展させていくために企画し開催した。2008年8月22日、組織委員会の発足式を開催し、組織委員全員で次の意義と目的を確認した。

- ① 再生可能エネルギー2006国際会議での確認事項を履行すること：クロージングの折、参加者全員で、真の意味での持続的世界は共生・循環型社会を保持していくのみによって達成され、そのためには再生可能エネルギーは不可欠であり長期的かつ一貫性のある政策と技術ソリューションが不可欠である。
- ② 更に状況は急務になっている：地球温暖化や異常気象の発生、原油はじめとするエネルギーコストの不安定さと世界経済への悪影響、地球規模の課題に対しわが国でも京都議定書の履行に向け、また、ポスト施策に向け多くの取組みが提起されている。国内外の専門家がわが国に一同に集まり先端的先進的技術を発表し合い分かち合うことは非常に時宣を得たことである。

優秀な人材育成と技術が必要である：太陽エネルギーを主たる起源とする再生可能エネルギーは無尽蔵、無公害かつ地球のエネルギーバランスを崩さない究極のエネルギーである。この期待に応えるために優秀な人材の育成と技術の蓄積が不可能であり、特に若い研究者や大学生に国際会議に接する場を提供する。

- ④ クリーンエネルギー化の加速は世界各国の共通課題である：国際エネルギー機関であるIEAは2050年でのCO2排出半減イメージを提唱、再生可能エネルギーの利用と省エネ技術の発展は不可欠である事を提示、ものづくりを得意とする日本が国際社会に向けて発信、そして貢献する絶好の機会である。その後、国際機関IRENAの設立や米国のグリーンニューデール政策などが発表された。
- ⑤ 世界第1級の国際会議を実現する：国内外からの論文発表に加え、政策や技術の分野で国際的に著名な専門家を招待し、21世紀中葉を見つめた技術を明らかにする国際色豊かな第1級の国際会議を実現する。

以上の思いを抱き再生可能エネルギー2010国際会議を開催した。車の両輪である国際展示会も盛大に行われた。「再生可能エネルギー世界フェア2010」と命名し当国際会議と2つの展示会(第5回新エネルギー世界展示会とPVJapan2010)を一体とした一大イベントとして企画された。

(2) 国際会議と「再生可能エネルギー世界フェア2010」の概要

本国際会議のスローガン“Advanced Technology Paths to Global Sustainability”のもとに企画した分野は、政策課題、太陽光発電、太陽熱発電、省エネルギー建築、風力、バイオマス、水素・燃料電池、海洋エネルギー、地熱、新電力システム、省エネ・熱利用、中小水力・未利用エネルギーの12分野である。

国際会議には日本を含め66カ国から1,359名が参加し、6月27日(日)~7月2日(金)の6日間で行われた。使用言語は英語である。957件の論文がプログラム委員による査読審査を通過、会場では887件の論文発表が行われた。招待講演者18名による特別講演、国際会議の枠内で企画した10件のワークショップでの講演81件、合計986件の発表や講演があり、連日全ての会議場で活発に質疑応答が交わされた。439名もの海外からの参加者があったこと、297名の学生の参加があった。このことは、当初掲げた国際会議の目的を満たしている。

併行して、ユニークな特別セッションが組まれた。METI / NEDO 主催のもとで IEA と IRENA トップを招き今後の再生可能エネルギーの国際的展開を議論したセッション、NEDO、AIST、NEF の特徴あるセッション、横浜市が主催する市民フォーラム、日本機械学会の定例シンポジウムなど 8 件のセッションが開催され、国際会議参加者に加え、1,370 名の参加があり、連日充実したセッションが展開された。

また、共同主催者である国際太陽エネルギー学会(本部、ドイツ)からは、会長、副会長はじめトップ 9 名が来日し、6 月 26 日～27 日の理事会を皮切りに、7 月 2 日まで多くの場面で活躍していただいた。

開会式は、国際展示会と共同開催とし、再生可能エネルギー世界フェア 2010 のもとに、展示会の開催日である 6 月 30 日に開催、約 1,000 名が出席した。組織委員長はじめとした主催者挨拶に続き、経済産業省(総括審議官 上田隆之氏)と横浜市(副市長 山田正人氏)から来賓挨拶をいただき、これに IEA や IRENA 代表が加わり 10 名によるテープカットが行われた。開会式に続き、IRENA 代表による記念講演のあと、日本代表(東京大学理学部長 山形俊男博士)と海外代表(NREL プリンシパル、デービッド・レネ博士)による基調講演が行われた。

準備段階も含め、横浜市に多大な協力をいただいた。準備段階での市長主催の記者会見、国際会議初日、28 日に開催された市長主催歓迎パーティ、市民フォーラムの開催、組織委員会と共同で開催した市内中学生によるポスターコンテスト、更には、バンケットでの催しものに対し支援をいただいた。

テクニカルツアーは、半日ツアーとして 28 日(月)は三菱重工業(株)の大型風力発電機の製造現場と運転現場の見学、29 日(火)は海洋研究開発機構を訪問し地球シミュレーターとしんかい 6500 など最先端技術を見学、3 日(土)は 1 日ツアーとして山梨県北杜市にある太陽電池大規模実証実験を見学した。いずれも 7 割以上は海外からの参加者であった。

国際展示会は、再生可能エネルギー世界フェア 2010 のもと、6 月 30 日から 7 月 2 日の 3 日間 44,290 名の来場者を得て盛大に行われた。450 社・団体が展示を行った。注目の出展テーマ、[] マイクログリッド IT システム、[] エネルギー貯蔵(電力・熱)、[] 革新的太陽電池の開発の 3 つを中心に各分野から、わが国の産業界や研究機関から最新技術商品の紹介があった。海外からも大使館など 67 社/ 機関が出展、また、アカデミックコーナーには 42 の大学や研究機関が出展した。併行して、展示会場内で開催された 39 件を含めて国際展示会では 62 件ものワークショップやフォーラムが行われた。

再生可能エネルギー2010世界フェア イベントおよび参加者数一覧

イベント項目	期 日		参加者数
1 RE2010国際会議 参加者数	6/27-7/2		1,359
・発表論文および講演数	6/28-7/2	986	
・RE2010国際会議 バンケット参加者数	6月30日	1,000 ^{*2}	
2 RE2010国際会議 ワークショップ			
Innovative Solar Cells	6月28日		
Zero-Energy Housing Workshop	6月28日		
Future Prospects and Innovation for Giga-Watt	6月29日		
ISES Workshop 1	6月29日		
The 2 nd Solar Energy Utilization Promotion Forum	6月30日		150 ^{*1}
ISES W/S on photovoltaic vs .Concentrated Solar Power Technologies	6月30日		20 ^{*1}
Kyoto University Global COE WS on Country Report2010	7月1日		10 ^{*1}
Actions to Sustainable Campus by The University of Tokyo	7月1日		10 ^{*1}
Advanced Grid System Workshop	7月1日		
Workshop on Symbiotic Technologies (WST) by Keio University	7月2日		11 ^{*1}
3 RE2010国際会議 特別セッション			
NEDO/IEA-T8 NEDOワークショップ	6月27日		80
第20回日本機械学会 環境工学シンポジウム	6/27-28		200
横浜市主催市民フォーラム	6月28日		300
METI/NEDO特別セッション	6月29日		240
NEDOセッション	6月30日		140
NEF新エネルギー導入セミナー	7月1日		120
AISTセッション	7月1日		130
第4回海洋エネルギー資源フォーラム	7月2日		160
4 テクニカルツアー			
三菱重工業(株): 製造工場と大型風車	6月28日	25 ^{*2}	
JEMASTEC:スパコンと深海6500	6月29日	32 ^{*2}	
北杜市:メガソーラー実証研究所	7月3日	30 ^{*2}	
5 再生可能エネルギー世界フェア2010 開会式 (国際会議350名, 国際展示会650名)	6月30日	350 ^{*2}	650
国際会議、国際会議併行W/Sおよび開会式 参加者数			3,580
国際展示会 参加数(第5回新エネルギー世界展およびPVJapan2010)	6/30-7/2		40,710
6 国際展示会でのワークショップおよびフォーラム数	6/30-7/2		
・第5回新エネルギー世界展示会 : 14件、うち展示会場内 9件			
・PVJapan2010 : 48件、うち展示会場内30件			
再生可能エネルギー世界フェア2010 参加者数			44,290

*1:国際会議参加以外的人数 *2:国際会議参加者に含まれている。

(3) 開会式・来賓挨拶・基調講演等

開会式は、来賓者の利便を考え国際展示会が開催される6月30日に合わせて、国際会議主催者(組織委員会)と国際展示会主催者(再生可能エネルギー協議会、PV Japan-太陽光発電協会およびSemi Japan)の共同開催として行われた。これらの共同体として再生可能エネルギー世界フェア2010とバーチャルに命名している。

開会式 日時 6月30日(水) 10:00-10:40 パシフィコ横浜 会議センター1F メインホール

1) 主催者挨拶

- ・再生可能エネルギー2010 国際会議 組織委員長 柏木孝夫氏(東京工業大学 教授)
- ・再生可能エネルギー2010 国際会議 共催者代表挨拶 デービッド・レネ氏(ISES 会長)
- ・再生可能エネルギー国際展示会主催者 兼 JCRE 代表 黒川浩助氏(東京工業大学 特任教授)
- ・PV Japan 主催者挨拶 JPEA 理事 永澤 淳氏(三菱電機(株) 太陽光発電システム事業部長)

2) 来賓挨拶

- ・経済産業省 総括審議官 上田隆之氏
- ・横浜市 副市長 山田正人氏

3) テープカット: 10名の登壇者により行われた。



中央右から: 上田隆之氏、山田正人氏、ヒューゴ・ルーカス氏(IRENA)、ハンス・ヨルゲン・コッホ氏(IEA)
中央左から: 柏木孝夫氏、黒川浩助氏、デービッド・レネ氏、永澤 淳氏、スタンリー・マイヤーズ氏(SEMI)、
横山伸也氏(JCRE)、以上10名によりテープカット。

基調講演 10:40-12:30 同一会場

開会式に引き続いて基調講演が行われた。今回、147カ国の参加を得て正式な発足を間近かに控えるIRENA(国際再生可能エネルギー機関)からヒューゴ・ルーカス氏が代表として参加いただいたので基調講演に先立ち約20分間記念講演を依頼した。

基調講演はわが国から代表1名、海外から代表1名の2名の方により、それぞれ40分間行われた。

① 基調講演1

東京大学大学院理学系研究科長・理学部長 理学博士 山形俊男氏
(壇上での紹介者:独立行政法人海洋研究開発機構 執行役海洋工学センター長 堀田 平氏)

②基調講演2

米国エネルギー省国立再生可能エネルギー研究所(NREL) プリンシパル、Ph 博士 デービッド・レネ氏
(壇上での紹介者:SEMI プレジデント兼 CEO スタンリー・マイヤーズ氏)

組織委員長 開会挨拶 (東京工業大学教授 柏木孝夫氏)



おはようございます。組織委員長として一言開会のご挨拶を申し上げます。皆様ご存知のように再生可能エネルギー技術発展の重要性は21世紀に入り、益々大きくなり、その重要性は年々重みを増していきます。太陽電池コストの低減により住宅への導入が促進しつつありますが、これを1つの例にとっても再生可能エネルギーの技術開発は、今世紀最大課題の1つである環境とエネルギー問題の解決策として世界的にその期待は高まっております。

世界のエネルギー需給に関するある長期計画では、2050年までに一次エネルギーの凡そ50%が再生可能エネルギーになる可能性があり、2100年ではその比率は2/3以上になるであろうというシナリオがあります。私たちはこの積極的な目標に向かってできるだけ素早く行動を起こす必要があり、その行動こそが、エネルギー選択の道を拓き、どのような生活が Quality of Life かを明確にするものと思います。再生可能エネルギーはすべての人類に与えられるゆえ、非常に平和的なエネルギー源でもあります。私たち組織委員会240名以上のメンバーが2年以上の歳月をかけ、当国際会議の成功に向け不断の努力をしてきました。そして、会議スローガンとして "Advanced Technology Paths to Global Sustainability" (先進技術を通じて地球の持続性を築こう)を掲げています。私は組織委員長としてすべての関係者に謝意を表すとともに、特に国際諮問委員の方々の強力なご支援に謝意を表します。

ここ横浜に招いていただいた横浜市にも謝意を表します。横浜市はわが国の環境モデル都市として選定されており、最も積極的に環境問題に取り組んでいる都市であります。会議だけではなく素晴らしい Water front City でもあります。

組織委員会は、この会議が、グリーンでクリーンな理想的なエネルギーシステムを21世紀に向けて確立するため様々な提案を出し合い、かけがえのない地球に参加者全員が貢献する、そのような会議になるよう企画しました。再生可能エネルギーは強力な世界経済の成長を促がす筈です。どうもご清聴ありがとうございました。

基調講演1 講演要旨 (東京大学教授、理学部長 山形俊男氏)

演題 気候変化、変動と持続的なグリーンエネルギー

温暖化効果ガスが地球を覆うにつれ、大気上層からの長波長放射の通過量が減り、地球上での温度上昇が発生する。非常に単純な現象が現在起こっている。産業革命以降の人間活動にもとづく CO₂増加が原因で発生している気候変化(Climate Change)である。異常気象に代表される気候変動(Climate Variation)も同時に発生し、我々の生活を脅かしている。

人為的原因にもとづく気候変化のない世界を実現するためには、飲料水と食料の持続的な確保とともに、再生可能エネルギーを利用するなど従来型でないエネルギー源の技術革新を追及する必要がある。大気、バイオ、海洋などに再生可能エネルギー源が存在する。それゆえ、太陽光、風力、潮力、波力、水力、バイオマスなど再生可能エネルギーの利用を持続的に可能にすることが、気候変化と変動を考える上で重要である。



気候“変動”(Variation)は、季節の変わり目から10年間くらいの平均的状態からの気候変動を言い、自然現象が原因で惹き起こされる。他方、気候“変化”(Change)は、その状態が長期間にわたって変化する状況を言い、大気や海洋の自然システムに、外から大きな力がかかって発生する現象である。典型的な例が現在の地球温暖化であり、人為的原因で温室効果ガスが増加した。人間活動に起因するのが気候“変化”である。気候変化と言う場合、もうひとつの概念がある。即ち、地球の回転軌道と地球軸の傾きの変化に起因し何万年、何十万年の周期で起こる気候変化である。太陽光の輻射熱の変化で発生する氷河期が典型例である。気候に対する対策を考える時、気候変化と気候変動を混乱してはならない。異常気象や異常な自然現象は気候変動であり、気候変化ではない。

気候変動を研究する私たちが明言できることは、気候科学を専門的学術的に研究するコミュニティができ、そこでは気候変動の予測技術が急速に進展しているということである。1,2年先までのエルニーニョ現象の発生を予測できる。グリーンエネルギーシステムの構築を21世紀に向け持続的に展開していくためには、気候変動の予測技術の確立は不可欠であり、今や人間社会にとって欠くべからざるものになっている。

基調講演2 講演要旨 (NREL プリンシパル Ph 博士 デービッド・レネ氏)

演題 世界中の太陽光発電の現状と今後に向けた動向



太陽光発電技術は過去30年間を振り返ると、効率、コスト、応用面で大きな進歩をとげた。発表では太陽電池技術と市場の現在を総括し、今後どのような市場になるかその期待を述べたい。世界全体を見渡した時、住宅用や、農村部のコミュニティ、また開発途上国では系統に連系しない独立電源として、現在普及している。一方、既存配電システムシステムの一環として、場合によっては大容量集中管理方式のソーラーステーションを設置して、給配電盤に接続、もしくは地域の系統線に直接連結しシステムとして普及してきている。系統連系技術は近年先進諸国で研究開発が進められ急速に発展してきた。米国、ヨーロッパ、日本でこの傾向は顕著である。しかしながら、前者の独立電源としての領域も需要の伸びが将来とも予測され、一定の市場を形成していくと思われる。

太陽エネルギー源は世界中どこでもエネルギー価値として取り出すことができる。太陽エネルギーの豊富なサハラ砂漠、ゴビ砂漠、もしくは米国南西部の砂漠地帯に太陽電池を95,000km²敷き詰めれば今日現在の世界電力需要のすべてを賄えるだけの力がある。太陽光発電の市場展開を成功させるためには相互に作用し合う多くの要素技術が必要である。民間による投資、製造スケールの大規模化、新技術製品の研究開発、素材と製造の両面のコスト削減、新発想でのビジネスモデル、そして政府の政策である。これらの要素が相乗効果を上げてこそ市場における真の発展があり、更なる技術的発展につながっていく。

しかしながら、現状は多くの問題を抱えている。初期投資コストが高いこと、エネルギー源が不連続であること、設置業者も電力会社も住宅に対し施工技術が十分あるとは言えないこと、エネルギー強度が低いこと(ある要求量を満たそうとする場合、コストに見合ったエネルギー量を得るには大量の土地や面積が必要になる)、地域や電力インフラの整備不足、政策や法制面での不整備などである。それがゆえ、独立電源系に軸足を置いてそこからエネルギー需要の議論を展開していくべきと考える専門家も多いことは事実である。しかし、これらの問題解決に向け多くの取り組みが行われていることも事実である。その中でも、地域や国レベルの配電網に直接連系する技術開発は特に顕著である。その例のいくつかを講演で紹介する。

(4) 参加国・地域、発表論文と分析、ジャーナル

国際会議参加者数と国別・地域別数

日本を入れて66カ国、1359名の参加者を得た国際会議となった。2006年幕張メッセで開催したRE2006との比較を下記に示す。特徴的なのは、アジア地域からの参加者が2倍以上増加したことである。アジア地域の日本への期待感とともに、2006年を始点に、4年ごとに日本で再生可能エネルギー国際会議を開催、その中間年はアジア諸国を持ち回ることを決め2008年、韓国で開催したことも好影響を与えたと考えられる。

国・地域	RE2006	RE2010		アジア	RE2010
		(国数)			
日本	804	(1)	920	韓国	69
アジア	116	(19)	264	台湾	55
ヨーロッパ	70	(20)	77	中国	42
北米	28	(2)	34	タイ	38
オセアニア	8	(5)	24	インドネシア	16
アフリカ	15	(8)	15	シンガポール	10
中近東	4	(4)	12	インドネシア	9
中南米	6	(6)	7	マレーシア	6
ロシア	12	(1)	6	その他11カ国	19
	1,063	(66)	1,359		264

国際会議における発表件数

国際会議の開催に向けて募集した論文発表要旨の提出数は12分野合計で957件、ワークショップ部分を入れると962件であった。一方、会期中に会場で発表された分野別一般論文は887件、ワークショップで発表や講演された件数が81件、招待講演者による講演が18件、合計986件の発表が行われた。

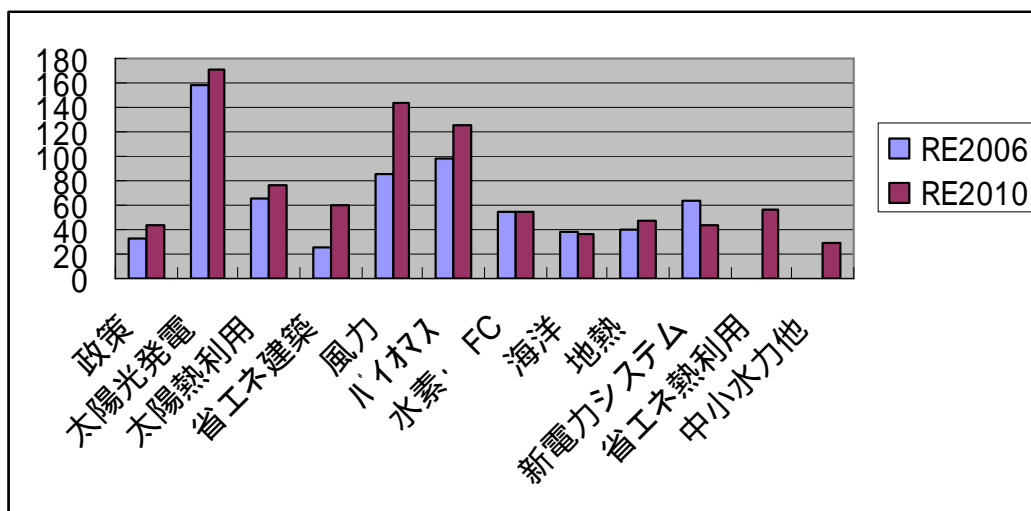
提出・発表内容	件数	補足
論文発表要旨(アブストラクト)提出数	957	ワークショップ用5件を除く
会期中での発表数		
・会場で的一般論文発表数	887	オーラル発表 459件 ポスター発表 428件
・招待講演者による講演数	18	招待講演者18名
・国際会議プログラム内WS等での発表および講演	81	10のWS(ワークショップ)を開催
合計	986	

発表件数986件：日本570件、海外416件(台湾58、韓国55、タイ38、中国37、その他228)

一般論文発表の分野別一覧

分野	オーラル	ポスター	合計	分野	オーラル	ポスター	合計
I. 政策	28	16	44	VII. 水素・FC	26	28	54
II. 太陽光発電	55	116	171	VIII. 海洋	22	14	36
III. 太陽熱利用	39	38	77	IX. 地熱	27	20	47
IV. 省エネ建築	30	30	60	X. 新電力	25	18	43
V. 風力	79	64	143	XI. 省エネ熱利用	35	21	56
VI. ハイオマス	70	56	126	XII. 中小水力他	23	7	30
				合計	459	428	887

分野別一般論文発表件数887件を、RE2006国際会議(663件)と比較した分野別件数を下記にグラフにした。当国際会議では2分野が増え12分野となっている。分野ごとのリーダーの指揮のもとほぼ順調に伸びてきているが、その中でも省エネ建築、風力の伸びが大きかった。反面、新電力システムの伸びはマイナスとなった。分野として技術的トピックスをもっと分かり易くするなど次回に生かしていく。



学会ジャーナルへの再投稿アレンジメント

今回は初めての試みとして、RE2010 国際会議の論文提出者が希望すれば覚書や話し合いで合意ができた学会にも論文提出ができる仕組みづくりを行った。学会側の規定に則り再投稿は必要ではあるがオリジナルとして取り扱うこと、オプションではあるが RE2010 との関係性を明示することなどを盛り込んだ。

フル論文の提出件数 887 件のうち、287 件の再投稿希望が寄せられた。組織委員会では詳細情報を学会側に伝達し、希望者全員にその旨連絡した。希望学会および 287 件の内訳は次のとおりである。

- ・日本機械学会 203 件（国内 111, 海外 92）= 希望 7 分科学会から成る
- ・日本エネルギー学会 45 件（国内 18, 海外 27）
- ・電気化学会 8 件（国内 4, 海外 4）
- ・日本船舶海洋工学会 14 件（国内 10, 海外 4）
- ・日本地熱学会 17 件（国内 17, 海外 0）

(5) 招待講演者

国際会議での招待講演者 (分野ごとに依頼、計18名)



AREA 1 : 政策

HANS JØRGEN PALUDAN-MÜLLER KOCH, (デンマーク)
IEA-RETD 議長、Deputy State Secretary, Ministry of Climate and Energy, Danish Energy Agency (環境エネルギー大臣官房)
Dan TON, (米国) エネルギー省エネルギー効率・再生可能エネルギー部門システム統合プログラム部長
Jeff LYNG, (米国) コロラド州政府再生可能エネルギー政策部長、米国太陽エネルギー学会ボードメンバー、会長職

AREA 2 : 太陽光発電

Joachim LUTHER, (シンガポール) 太陽エネルギー総合研究所 (SERIS) 筆頭執行役

AREA 3 : 太陽熱利用

Dr.-Ing. Michael GEYER, (スペイン) 欧州太陽熱発電協会 (ESTELA) 副会長

AREA 4 : 省エネルギー建築

Deo PRASAD, (オーストラリア) New South Wales 大学・教授

AREA 5 : 風力エネルギー

Steve SAWYER, (オランダ・米国) 世界風力エネルギー協議会 (GWEC) 事務総長、REN21 創始者。

Duarte FIGUEIRA, (英国) 英国エネルギー・気候変動省 (DECC) 再生可能エネルギー配備局 (WPD) 責任者。

AREA 6 : バイオマス

Chun-Zhu LI, (オーストラリア) カーチン大学先端科学技術研究所・教授、執行役

Paritid BHANDHUBANYONG, (タイ) 国立科学技術開発庁 (NSTDA) 長官付筆頭アドバイザー

AREA 7 : 水素・燃料電池

Kazunari DOMEN, (日本) 東京大学大学院工学系研究科教授

AREA 8 : 海洋エネルギー

Toshio YAMAGATA, (日本) 東京大学教授、理学部長

Per Christer LUND, (ノルウェー) 駐日ノルウェー大使館参事官 (科学・エネルギー担当)、NASDAQ OMX 電力買取市場マネージャ

AREA 9 : 地熱エネルギー

Ladislaus "Ladsi" RYBACH, (スイス) GEOWATT AG Zurich 公社 執行役専務取締役。国際地熱学会会長を長年つとめる。

AREA 10 : 新電力システム

Britta BUCHHOLZ, (ドイツ) The multi utility MVV Energie 社 "Grid and Plant Planning" 部門・部門長

Benjamin KROPOSKI, (米国) NREL の Distributed Energy Systems Integration 部門マネージャ

AREA 11 : 省エネ・熱利用

XU Wei, (中国) 中国アカデミー建築研究所 (CABR) 教授、建築環境部門執行役

AREA 12 : 中小水力・未利用エネルギー

Young-Ho LEE, (韓国) 韓国風力エネルギー協会 (KWEA) 副会長

特別セッション

METI/NEDO、AIST、NEF が主催する国際会議との並行セッションでも、国内外の専門家を招待して講演やパネル討論会が開催された。セッションごとの招待者は次のとおりである。

I. METI/NEDO セッション

基調講演

- | | |
|-------------|--------------------|
| ・ 田中伸男 | IEA 事務局長 |
| ・ ヒューゴ・ルーカス | IRENA プログラム マネージャー |
| ・ アニル・ターウエイ | アジア開発銀行 シニア アドバイザー |

ラウンドテーブル1「分散電源の未来」

- | | | |
|--------|-------------------------|--------------------|
| モデレーター | ・ ハンス・ヨルゲン・コッホ* (デンマーク) | IEA RETD 議長 |
| パネラー | ・ 黒川浩助 | 東京工業大学 特任教授 |
| | ・ ドルテ・フィグエラ* (英国) | 英国政府 再生可能エネルギー 部門長 |
| | ・ パリタッド・バンヂュバンヨン* (タイ) | タイ国家科学技術開発庁 顧問 |

* 印の方は国際会議での分野別招待者でもある。

ラウンドテーブル2「RE大量導入に向けた課題」

- | | | |
|--------|--------------------|--------------------|
| モデレーター | ・ キャリー・プロイド (米国) | 米国 PNNL 研究所 |
| パネラー | ・ ダン・トン* (米国) | 米国エネルギー省 電力局 プランナー |
| | ・ 市村知也 | NEDO 新エネルギー技術開発部長 |
| | ・ ブリッタ・ブックホルツ* (独) | MVVE ナジー 電力網計画部長 |
| | ・ 許洪華 (中国) | 中国電工研 副所長 |

* 印の方は国際会議での分野別招待者でもある。

ラウンドテーブル3「地域におけるRE導入の取組み」

- | | | |
|--------|---------------------------|----------------------|
| モデレーター | ・ 斎藤圭介 | 経済産業省 省エネ・新エネ 部長 |
| パネラー | ・ 下地敏彦 | 宮古島市長 |
| | ・ ウー・ラデンバーガー (独) | フライブルグ・グリーンシティ 観光局 |
| | ・ テッド・リュウ (米国) | ハワイ州政府 BETD ディレクター |
| | ・ スティーブン・フィンレイ (ニュージーランド) | ウエリントン市 技術保健局 マネージャー |

II. AIST セッション

「水素エネルギー」

- | | | |
|------|-------------------|-----------------|
| 紹介講演 | ・ 中村優美子 | 産総研 エネルギー技術研究部門 |
| 課題講演 | ・ トーマス・プロフェン (米国) | ロスアラモス国立研究所 |

「エネルギーネットワーク&グリッド」

- | | | |
|------|-----------------|------------------|
| 紹介講演 | ・ 村田晃伸 | 産総研 エネルギー技術研究部門 |
| 課題講演 | ・ クリス・マーナー (米国) | ローレンス・バークレー国立研究所 |

「パワーデバイス」

- | | | |
|------|-----------------|--------------------------------------|
| 紹介講演 | ・ 西澤伸一 | 産総研 エネルギー技術研究部門 |
| 課題講演 | ・ ミッシェル・ボンス (仏) | グルノーブル理工科学校・国立科学研究センター・ジョセフ・フーリエ大学教授 |

III. NEF セッション

新エネルギー導入拡大セミナー

- | | | |
|------|--------|------------------------------|
| 基調講演 | ・ 渡邊昇治 | 経済産業省 省エネ・新エネ部
新エネルギー対策課長 |
|------|--------|------------------------------|

- | | | |
|------|---------|------------------------------------|
| 事例講演 | ・ 川井 拓 | 三菱自動車(株)EVビジネス本部 |
| | ・ 細井昭宏 | 三洋ホームズ(株)事業戦略室 |
| | ・ 笹野ゆかり | 野村ホールディングス(株)
コーポレートシティズンシップ推進室 |

以上